

## 今本リーダー素案

### 3 - 3 新たな利水の理念

乾田でのイネの栽培が始まった弥生時代以来、河川水の積極的な利用が始められ、われわれは必要とする水の大部分を河川から取水してきた。とくに 20 世紀後半から、わが国の産業・経済は飛躍的に発展し、それに伴って河川からの取水量も激増した。

わが国は、世界平均の 2 倍という降水量に恵まれているが、地形は急峻で、河川流路も短いため、降水は短時間で海に流れてしまう。このため、全国の河川に利水を目的とした多数の大規模なダムや堰を設置し、これらにわが国の産業・経済の発展は支えられてきた。

現在の水資源開発基本計画では、水道事業者および自治体等による水需要予測を積み上げ、不足量をダムや堰等の水資源開発施設の建設により開発するという方式がとられている。しかし、河川の流量はもともと有限であり、取水量にも河川環境からの制約があるため、際限なく水資源を開発することはできない。さらに、水資源開発に用いるダムや堰は、いずれも河川環境を悪化させるという基本的な欠陥を有しており、利水についての抜本的な転換が必要となっている。

このため、これまでの理念とされた「水需要を補う水資源の開発」を、新たに「取水量を抑制する水需要管理」へと転換する。

ここに、水需要管理とは、より精度の高い水需要予測をもとに、節水、再利用、用途変更等により、河川からの取水量を極力抑制しようとするもので、具体的には、より精度の高い予測手法の開発に努めるとともに、水需要予測の手法あるいは予測に用いた原単位や係数を公表し、さらに一定期間ごとに予測の見直しを行なうものである。

われわれは、これまで、水が無制限に存在するかのようになり、大量に水を消費してきた。「世界水ビジョン」でも取り上げられたように、人口増加に伴う食料不足や水不足は国際的な大問題であり、輸入大国として世界の水を消費するわが国は、自ら率先して節水の襟度を示すべき時期にきている。こうした観点からも水需要管理は世界の潮流に合致するものである。